2020年5月17日付 愛媛新聞

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㊾

中国四国名所旧跡図

遍路旅 心残る風景描く

「中国四国名所旧跡」と記された表紙に続き、77枚の彩色された絵がとじられている。絵は和泉の堺に始まり、山陽道沿いに摂津・播磨・備前へと進み、その後瀬戸内海を渡って、讃岐・阿波・土佐・伊予を廻り、最後は66番札所の雲辺寺（徳島県三好市）で終わる。その経路から関西地域の遍路が描いた画帳と考えられる。

画帳をめくると、そのうちの1枚に、「大和国」と記された菅笠（すげがさ）と杖（つえ）を手にする遍路の姿があり、大和国田原本（奈良県田原本町）の仏絵師、西丈という名前が記されている。その右隣には、三津浜（松山市）の商人松井忠三郎という人物。2人は三津浜近くの道でばったり出会って意気投合、西丈は松井の家に泊めてもらい、その日の晩から翌朝にかけて和歌のやりとりをしている。

絵の余白には、「かしこくも書集けり敷島の名所を単（ひとつ）の杖にまかせて」とある。1本の杖を頼りに歩き、和歌の名所を書きいた画帳こそが、「中国四国名所旧跡図」といえよう。

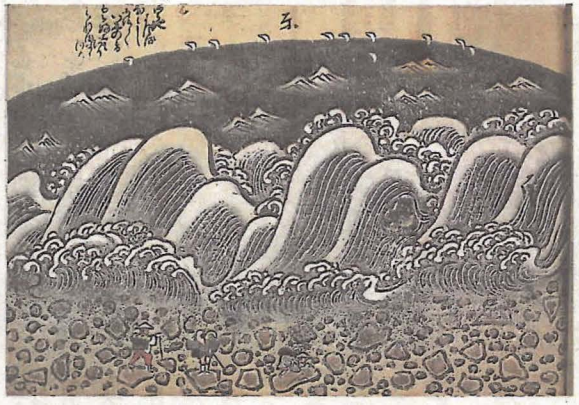
描く対象としては正規の札所は意外に少なく、番外札所、弘法大師ゆかりの旧跡、観光名所など多岐にわたっている。遍路の難所も多く描かれるが、その中に「飛石はね石」を描いたものがある。

順打ちの遍路が土佐に入ってすぐに待ち受ける難所で、道は整備されておらず、大きな岩が転がる海岸を進まなければならなかった。西丈は岩交じりの海岸を進む小さな旅人と、それを飲み込むような太平洋の高波を対比して描いている。その描写は写実的ではないが、対象の本質を捉える力強さがある。専門の絵師である西丈が描きのこした絵からは、江戸時代の遍路が実際に目にして、感じていたことがストレートに伝わってくる。

（学芸課長・井上淳）

〈月2回掲載します〉

「中国四国名所旧跡図」（江戸時代）での西丈が三津浜の商人と出会った場面＝県歴史文化博物館蔵



江戸時代の「中国四国名所旧跡図」に描かれた遍路の難所「飛石はね石」＝県歴史文化博物館蔵

掲載許可番号：d20230301-04